

Ⅲ 日帝本国・反日戦士の誕生

羽撃く

寒風吹きすさぶ原野に
朝日を蹴つて羽ばたく鳥の
自信に満ちた羽音のように
明けゆく世界に力強く踏み出そう
その決断の一步を
君がいまとどまつている地平に
かつての俺も立っていた
君がしっかりと両足で
大地にふんばるのではなく
頭で立つて歩んできたように
俺もかつてはそうだった
いま君が出口のない
堂々巡りをやっているように
かつては俺も同じだった
君がいま素っ裸にはなれないように
俺もかつてはためらった
だが時を待つてはいけない
地球は君の力を借りずとも廻るが

待たれる時は君を動かしてはしないのだ
君を変えるのは君自身
その決断の一步なのだ
その時は身をふるわせて味わうだろう
初めて巣を蹴り立って
大空に羽ばたくひな鳥の
あの不安と希望と喜びを
その時君は身をひきしめて感じるだろう
世界の充実したその肌ざわりを

一九七九・一・一二

急げ

急げ
日和る心にムチ打って
急げ
乱れる心をひきしめて
急げ
冷めた心を燃え立たせ
急げ
重いまぶたを見開いて
急げ
重い足を高くあげ
急げ
紅い嵐の来る前に
自ら扉を開けるため

一九七九・二・二五

革命戦士の条件

I

ホットな心がなければ
飢えたるものの苦しみを感じる
ナイーブさがなければ
地に詛われたるものの怒りを
オノレの怒りとする

II

パッションがなければ
革命戦士にはなれない

タフな肉体がなければ
鍛え抜かれたテクニックがなければ
いかなる困難をも乗り切る
不撓不屈の意志がなければ
敵を倒すことはできない

III

クールな頭脳がなければ
大胆に発想し
緻密に計算する頭脳がなければ
敵の裏をかき

敵の意表をつくしたたかさがなければ
革命戦争に勝つことはできない

一九七九・三・二七

反日戦士出撃の歌

I

海を隔てて燃え上がる
紅い狼煙を受けとめて
ひるまず進め怒濤のように
一氣に進め破竹のように
銃握りしめ爆弾抱え
我らが責務をまっとうし
敵の心臓ぶつとばせ

II

斃れし同志の面影胸に
敵への憎悪を燃え立たせ
ひるまず進め怒濤のように
一氣に進め破竹のように
銃握りしめ爆弾抱え
反日の旗を打ち振って
必ず果そう復讐を

III

反日武闘の歴史を糧に
敵の弾圧けちらして

ひるまず進め怒濤のように
一氣に進め破竹のように

銃握りしめ爆弾抱え

帝国主義者を殲滅し

世界革命開始せよ

IV

紅い火種は燃え上がり
熱い嵐がやってくる

ひるまず進め怒濤のように

一氣に進め破竹のように

銃握りしめ爆弾抱え

不滅の戦線構築し

勝利の幕をさあひらけ

一九七九・三・三一

遊撃戦数え歌

ひとつとせ

ひとりであつても

ゲリラはできる

恐れず踏み出せ

第一歩

ふたつとせ

不撓不屈の

意志もつて

敵陣深く

潜り込め

みつつとせ

密着接近

ターゲット

必ず屠ふれ

一発で

よつつとせ

予行演習

やるときも

必ず守れ

鉄則を

いつつとせ

一斉攻撃

やるときは

敵の指揮官

先ず倒せ

むつつとせ

無理な作戦

回避して

必ず退路を

確保せよ

ななつとせ

なれた頃に

注意せよ

自信過剰が

ケガのもと

やつつとせ

やつてやれない

ことはない

盲点さがせ

裏をかけ

ここのつとせ

個人主義では

勝ち抜けぬ

組織性を

鍛え抜け

テロルの季節

もはや耐えられまい
この窒息する沈黙に
もはや叫ばずにはいられまい
沈黙を強いられた疼きよ
私のいらだつ肉体に潜む
原始の叫びよ
胸の奥底から突き上げてくる
胸の奥底からこみ上げてくる
荒々しい荒々しい炎が
私の魂に火をつけ
私の身体を焼き焦がす
風が運び来る慟哭
風に乗り来る呻吟
風が呼び来るむせび泣き
軍靴で踏みにじられた植民地は
地獄の季節
死肉を喰らい生血を啜り
笑いがとまらぬ本国は

ぜい肉のつく季節
もはや許せまい
私の血は許せまい
自由を奪う鉄鎖
苦役を科す頸木
背に打ち下されるムチ
心臓に突き立てられる銃剣
地獄に蹴下す飢餓
子孫を断つ虐殺
もはやおしとどめ得まい
私の煮えたぎる血の叫びを
私の燃え上がる叛逆魂を
偽善の涙はやめてくれ
おしつけがましい同情は反吐が出る
空しいコトバは便所に捨てろ
まやかしの良心は踏みつぶせ
力のない行動はクソ喰らえ
すりかえのペンはへし折れ
さあ 起ち上がろう
ナイフを研いで

銃を手にして
爆弾抱えて
撃ち滅ぼせ
焼き尽せ
息の根とめろ
その喉頭をぶった切れ
私は女
帝国主義本国に生まれ
帝国主義本国に育ち
帝国主義本国のぜい肉を喰らつて
帝国主義本人を愛して
幸福と笑いに満ちた人生を生きてきた
私は反革命的な帝国主義本人
植民地は地獄の季節を知った今
私の魂にこびりついてきた
何かがガラガラと崩れゆく
地の底から沸き上がる
地獄の季節の叫びが
私の魂をくしけずる
もはやおしとどめ得まい

私の肉体を突き動かす
根源的な叫びを
憎眠を貪る本国に
テロルの熱い嵐を呼び寄せる
根源的な叫びを
もはや何ものも押し殺せまい
縷縷と荒野に打ち捨てられた白骨
吹き抜ける風が骨笛を吹き鳴らし
地上にさまよう怨霊の
啜り泣きをかきたてる
おし寄せる文明の波が
愛わしき共同体を破壊し
豊かな自然の恵みを奪われた
流浪の民人たちは
血を売り肉を売りやせほそる
手折られた花が凋み行くが如くに
くずおれゆく少女の
銀のしづく降るが如き真珠の涙に
わが思いをはせる時
わが魂はうちふるえ

わが憤激は爆発する
いざ出撃

厚化粧で武装した私は
セクシーな女に変身し

煮えたぎる憤激を

冷めたコンピューター・ブレインに

流し込み

作戦プランをはじき出す

黒いロールスロイスのVIPを

真赤なボルシェで追尾せよ

ブレイバックの利かないルートで

待ち伏せ襲撃

自動小銃撃ちまくり

VIPを血祭に

今夜も私は出撃する

VIPを追いもとめ

今夜も自動小銃がほえ立てる

VIPの血をもとめ

殺せ殺せ殺せと

植民地は地獄の季節

そして本国はテロルの季節

一九七九・五・二七

わが愛娘に捧げるバラード

娘よ

愛しい娘よ

オマエはなぜ泣くのだ

またワルガキどもに

虐められたんだな

娘よ

愛しい娘よ

オマエの涙は父ちゃんの胸を刺す

オマエの涙は父ちゃんの心をかきみだす

娘よ

泣くでない

母ちゃんあつてのオマエなのだ

母ちゃんいなければ

オマエは生まれてこないのだ

娘よ

確かにものごころついた

オマエのそばに

母ちゃんはいなかった

母ちゃんのぬくもりはなかった
だが娘よ

母ちゃんを怨むでないぞ

母ちゃんは父ちゃんを捨てても

オマエを捨てた訳ではないのだ

娘よ

涙をふいて聞いてくれ

母ちゃんの厳しさ

自分自身に対する厳しさ

それがいまの父ちゃんを支えている

母ちゃんの優しさ

他人に対する優しさ

それがいまの父ちゃんを支えている

母ちゃんの明るさとおおらかさ

それがいまの父ちゃんを支えている

父ちゃんが母ちゃんとめぐりあい

愛しあい

そして娘よ

オマエが生まれたとき

父ちゃんはそのことが

まるつきりわかつていなかったのだ娘よ

父ちゃんは愚かだった

父ちゃんは母ちゃんを愛しても

母ちゃんを知ることができなかった

母ちゃんを自分の世界に縛りつけ

服従させようとしていた

父ちゃんがまちがっていたのだ

母ちゃんの成長を

父ちゃんの一步も二歩も先を進んだ

母ちゃんの急速な成長を

認めることができず

母ちゃんとともに

成長しようとしなかった

父ちゃんがまちがっていたのだ

母ちゃんに支えられていたことに

気づかず

母ちゃんを支え返すことが

できなかった父ちゃん

母ちゃんの生き方に合流できず

母ちゃんの生き方を妨害しようとした父ちゃん

母ちゃんが切り出した別れ話を

父ちゃんへのつきつけとして

受けとめられず

母ちゃんをなぐりつけ

罵倒した父ちゃん

娘よ

この愚かな父ちゃんを怨んでくれ

娘よ

この愚かな父ちゃんをなじつてくれ

父ちゃんの胸から巢立ち旅立ち

大空へ向かって翔び去っていった

母ちゃんのかわり身となつて

娘よ

この父ちゃんを批判してくれ

娘よ

いま母ちゃんは確信に満ちて生きている

いかなる困難にも屈せず

決して微笑みを絶やすことなく

オマエのことをしつかと胸に抱いて

オマエのことを一時も忘れず

オマエの微笑みを糧として

オマエの未来のために

オマエの手本となるために

オマエの涙

それは母ちゃんの涙なのだ

オマエの笑顔

それは母ちゃんの笑顔なのだ

オマエの底ぬけの明かるさ

それは母ちゃんの底ぬけの

明かるさなのだ

オマエのしたたかな強さ

それは母ちゃんのしたたかな

強さなのだ

オマエの鏡

それは母ちゃんなのだ

娘よ

母ちゃんは必ずオマエを迎えにくる

あの大きな瞳を

星のように輝かして

必ずオマエを抱きしめにくる

その時父ちゃんは

決して母ちゃんを失望させまい

娘よ

父ちゃんはオマエに誓う

決して母ちゃんを失望させないと

一九七九・一・一三

あいつとの出会い

それは晩秋

こぬか雨降る朝だった

なぜとはなしに

重苦しい気分で見覚めた私は

いつものように

配達された朝刊に

軽い視線を投げかけた

だがその日の朝の朝刊は

私の視線を逃がさずに

私の視線を飲み込んだ

一瞬私の心臓は

氷ついたかのように停止して

爆発するかのように高鳴った

おさえようもなく

私の手は激しくうちふるえ

私の消え入りそうな視線は

朝刊一面の写真にひきつけられた

首相テロに倒れる

テロリストは射殺

それは忘れもしない

まぎれもなくあいつだった

敵をみごとに撃ち殺し

敵弾に射抜かれて

血まみれになりながら

なおも戦いゆかんとする

不屈の戦闘魂で武装した

まぎれもなく

あいつの死体だった

それは晩秋

こぬか雨降る夜だった

女であるがゆえにかなわぬ

世の不条理に絶望し

生きる望みを失って

あてもなくさまよっていた

うちひしがれた私の前に

あいつは偶然あらわれた

その偶然の出会い

私を激しくゆさぶった

あいつとの出会い

それは私を大きく変えた

あいつの一つ一つの言葉は

私の胸をグサリと刺した

その痛みは快く

私の心の眼を被っていた

何枚ものウロコを

一枚一枚はぎとった

俺は東北の貧農の末子として生まれ

口減らしのために継子にやられ

継母に虐め抜かれながら育った

ひもじい思いに耐えられず

何度パンやゼニを盗んだろう

その都度とことん折檻され

少年院にも入れられた

だが人一倍負けず嫌いで

勉強が好きだった俺は

家の抑圧と周囲の差別から

自分を支え逃れるために

奴らを見返してやる一心で

いつしか学業に打ち込むようになり

アルバイトをしながら

高校・大学へと進んだ

苦しい高校生活を乗り切って

入学試験も突破して

鼻高々だった俺は

当時始まった学園闘争の中で

今まで自分を支えてきた考えが

全く犯罪的なものであることを

いやおうなく自覚し

真の問題解決とは何かに思い悩み

人間いかに生くべきかに懊悩し

一步一步革命へと

近づいていった

テメエ独りだけが

抑圧と差別から抜け出そうという

当時の俺の生きざまは

テメエさえよけりゃそれでいいという

まさにエゴイズムそのものであり

階級階層社会の中で

上へ上へと登りつめるために
優等生という特権を
得ようとした俺は
まさにそうすることで
多くの仲間を劣等生として蹴落し
自ら抑圧と差別を
つくり出してきたのだ
優等生たらんとして
ひたすら上へ上へと登りつめる
エゴイスティクな生きざまは
日本という国家・民族についても言えるのだ
「明治」「大正」「昭和」という時代は
まさに天皇を頂点とした日本民族が
西洋諸国に追いつき
西洋諸国を追い越すために
東アジアの人民を
侵略・収奪・抑圧してきた歴史なのだ
いや日本民族は「明治」時代以前から
古代建国の前後から
すでに自民族の特権拡大のために

他民族を征服し収奪し抑圧してきたのだ
俺自身のエゴイスティクな生きざまを
俺は嫌悪し呪い憎悪した
日本民族のエゴイスティクな在りようを
俺は嫌悪し呪い憎悪した
俺は継子にやっただけ
俺はそのことでは怨んじやいない
メシも食わせず俺を虐待した継母を
俺はそのことでは怨んじやいない
しかし彼らを含めた
貧しいどん底の日本人たちが
その貧困から脱出せんがために
帝国主義者どもと戦うのではなくして
植民地侵略の尖兵となって
東アジアの人民を
収奪・抑圧・虐殺したことを
決して許すことはできないのだ
あいつの半生
その苦悩に満ちた半生に比べて
私の半生はなんとすつべらで

なんと甘えたものであつたらう
なんと特権的なものであつたらう
特権の拡大が叶わぬからと言って
生きる望みがなくなったなどと
思い悩んでいた私は
なんと愚かであつたらう
私はまるで赤子のように
あいつの胸に顔をうずめ
泣きはらした
涙の限り
泣きはらした
それは一年たったある日
私はいつに尋ねた
死について
あなたはどえ考えていると
しばらく考え込んでいたあいつは
一言一言かみしめるように語った
死一般というのは意味がない
死とは具体的なものだ
俺にとつて関心があるのは

それが敵の死か
味方の死かということだ
敵の死には
喜びをもつて
味方の死には
悲しみと怒りをもつて
そしてオノレの死は恐れない
革命戦士は死んでも
革命そのものは死にはしない
死を恐れて
なんで革命を達成しえようか
敵を殺すこと
それは革命のために不可避だ
君は帝国主義者を殺せるか？
人の死は
それが誰であろうと
私は悲しいものだと思ってた
人を殺すこと
それは誰であらうとも
悪いことだと思つてた

人を殺すこと

それはどんなに憎い人であつても

今の私にはできないと

私はあいつの眼をみつめたまま

心の中でつぶやいた

今の私にはできないと

それからしばらくして

あいつは去つていった

私のもとから去つていった

最後の手紙を残して

だまつて去るのを許してくれ

決して君を捨てた訳じゃない

決して君を嫌いになつた訳じゃない

今でも君を愛してる

だからこそ去るのだ

同志と

俺は君を呼びたかつた

わが同志と

さようなら

いつかどこかで

再会を！

獄闘の開始を

奴らを前にした

捕われし獄中の戦士よ

決して戦いの戈を収めることなく

その拒絶の鎌首を

昂然と傲然ともたげよ

奴らを前にした

不降身の戦士よ

決して己が齒を奴らに見せることなく

煮えたぎる己が胸中で

沈黙の牙をこそ

鋭く鋭く研ぎ澄ませ

奴らを前にした

不辱志の戦士よ

決して奴らの言葉に耳傾けることなく

憎悪の炎燃やす目線もて

奴らの威圧奸計打ち砕け

あいつの言葉は

私の胸にグサリと刺つた

だがあいつはもはや返つてこない

永遠に返つてこない

私は今

満身の喜びをもつて

あいつが撃ち倒した

帝国主義者の死を迎えよう

私は今

満身の悲しみと怒りをもつて

敵の銃弾に倒れた

あいつの死を迎えよう

あいつの死を

私は決して無駄にせず

あいつの言葉にこたえよう

同志と

俺は君を呼びたかつた

わが同志と

その言葉に

今私はこたえよう

一九七九・五・二八

奴らを前にした

革命の大義に生きる戦士よ

決して一時的敗北を悔むことなく

獄におかれた己が身を

獅子身中のトゲとなし

完黙獄闘開始せよ

獄に苦闘する仲間と

ともに進撃開始せよ

一九七九・四・一九

国賊

あれは春三月

滅びに至る日本の如く

桜の舞い散る頃だった

日本刀を抜き放ち

銃を手にしたイヌどもが

デカ鼻ひくひく鳴らして

ワンワンワンワンやつてきて

俺を無理矢理しょつぴいた

この非国民め

キサマら国賊はだな

ぶつ殺しちゃつてもいいんだ

そういう下命がでとるんだ

この反日ビラを知つとるな

知らんとは言わさんぞ

だまつとつてもだめだぜ

ちゃんと調べはついてんだ

キサマが反日団員だつてことは

とうの昔にバレてんだ

しゃべつたが身のためだ

さあしゃべるんだこの野郎

それじゃ体にきいたるか

奴らは俺の手をおさえつけ

釘を手の甲に打ち込んで

針を爪先から突き刺した

キリキリと身をしめつける

俺はその痛さにこらえつつ

奴らのツラを目で撃つた

この非国民め

キサマら国賊は生かしちゃおけねえ

キサマら殺すにゃ朝飯前よ

さあ口を割つたれこの強突張り

奴らは俺のズボンを剥ぎとり

太腿むき出しに正座させ

ボロで包んだ鉄棒で

力まかせに打ちつけた

鉄は肉にズボッと喰い込み

腿は痛みではれあがり

腐つたように燃え立つた

俺はその痛さにこらえつつ

眼をカッと見開いて

奴らのツラを目で撃つた

この非国民め

キサマら国賊にはな

人権などありゃせんよ

防禦権などお笑いよ

反日などとはだいそれた

キサマはそれでも日本人か

さつさと頭を下げて口を割れ

奴らは俺の衣服を全てはぎとつて

天上からぶら下ったロープに

逆づりにつり下げて

ビシビシビシと

竹刀の連打をあびせた

体を走りぬける激痛に

俺の意識はこと切れて

闇の中に頓座した

だが奴らは水をかけ

何度もつるし直して連打した

くる日もくる日も

奴らの拷問は続いた

俺の体ははれ上がり

はれがひく間もなくまたはれ上がり

俺の体は無数のどす黒いアザと

幾条もの紫色の筋とで被われ

皮膚は各処で破れ切れ

血の塊りがとび散った

俺は消えゆく意識を燃え立たせ

全身憎悪の炎と化して

奴らのツラを目で撃つた

この非国民め

キサマら売国奴はよ

地獄落ちがいいとこよ

外国に身売りしたキサマらは

殺しても殺したりんのよ

奴らは俺の顔をぬれタオルで被い

トウガラシを入れたぬるま湯を

俺の顔の上から流した

口から鼻から流れ込むトウガラシ汁は

俺の気管支の中にまで流れ込み
呼吸困難に陥った俺は
焼き殺されるような痛みに
身を左右によじらせて
激しく激しく唸込んだ
俺はただ
生きること
生きることのみを考えた
俺はただ
勝利すること
勝利することのみを考えた
奴らは決して俺を落せない
奴らは初めから負けているんだ
拷問そのものが
奴らの敗北のあらわれなのだ
俺はひたすら
憎悪を
憎悪のみをかきたてた
目線で奴らを殺すのだ
氣迫で奴らを殺すのだ

呪いで奴らを殺すのだ
憎悪で奴らを殺すのだ
奴らは空しく空しく叫び続けた
この国賊め
この非国民め
この売国奴め
この裏切り者め
それは春三月
滅びに至る日本の如く
桜の舞い散る頃だった

一九七九・五・二七

日帝本国人

息子よ
オマエのぶあつい獄中日記を
父は今やつと読み終えた
外は雪
昨夜から降りつる雪模様は
父にシベリアの恐怖を呼び起こす
獄の冬は思ったより寒かろう
獄寒にもめげずに
かじかむ手に息を吹きかけ
腕の痛みをこらえつつ
手記を綴るオマエの姿を
父は眼に浮かべて
しっかりと受けとめている
父にも獄寒の体験がある
オマエから言わせれば
反革命兵士として
父はスターリン体制下の
シベリアの監獄に
とらわれていた
かつての戦友どうしが
いがみ合い
けたおし合う
ラーゲリを生きのびて
父は内地に帰還した
敗残の皇軍兵士は
スターリン体制下のラーゲリで
ゴリゴリの反共主義に成長して
敗れた祖国に帰還した
オマエが共産主義者に
かぶれてからというもの
父はおまえを息子とは
思つてこなかった
それはオマエにとつて
望むところだったろう
オマエは父を糾弾する
天皇から銃をいただいて
皇軍兵士として
外地に出征したことを

オマエは父を糾弾する
朝鮮人を虐殺し
中国人を虐殺し
モンゴル人を虐殺し
奪い尽くし
焼き尽くしたことを
オマエは父を糾弾する
なぜ侵略戦争に
反対しなかったのかと
なぜ皇軍兵士になることを
拒否しなかったのかと
なぜ天皇に銃を向けず
被植民地人民を殺したのかと
だが息子よ
オマエは戦争を知らん子供だ
せいぜい知識としてしか
知らない子供だ
当時の国民にとって
天皇は絶対だった
国家の命令は

天皇の命令であり
上官の命令は
天皇の命令だった
天皇の命令にはむかうなど
論外だった
ましてや天皇の命を狙うなど
問題外だった
それは自殺行為に等しかった
父は確かに
朝鮮人を殺害し
中国人を殺害し
モンゴル人を殺害した
しかしそれは戦争という
国家行為の中での
上官の命令に
基づいたものなのだ
父は皇軍兵士であり
天皇の命令には
従う以外なかったのだ
しかしオマエは糾弾するだろう

たとえ上官の命令であろうとも
責任のがれはできないと
だがそれが軍隊というものなのだ
オマエには理解してもらえまいが
それが戦争というものなのだ
虫も殺せぬ少年兵が
一夜にして
殺人マシーンにひょう変する
それが戦争というものなのだ
しかしオマエはなおも
父を厳しく問いつめるだろう
今の父が
再び天皇に命令されたなら
侵略戦争に参加して
被植民地人民に
銃口を向けるのかと
今の父は答えられまい
オマエにはつきりと
約束はできまい
オマエたちの行為は

昔で言えば大逆罪だ
極刑ものの国賊で
即決ものの非国民だ
今も世間の人たちは
声を大にして叫んでいる
一日も早く死刑にしろと
だが父は世間の人たちと
唱和する気にはなれない
それはオマエがオレの息子
だからではない
敢えて誤解を恐れずに言うならば
オマエは父にとっての
一つの救いだ
感じはじめたからなのだ
オマエの言う日帝が
アイヌモシリを強奪し
ウチナーを併合し
台湾を占領し
朝鮮を植民地支配し
中国大陆に侵略し

インドシナを
マラヤを
ビルマを
フィリピンを
インドネシアを
パプアを
南太平洋の島々を
軍靴で踏みつけ
銃剣で荒し回ったということを
父は否定する根拠を
もっていない
戦後の日本が
米帝の朝鮮侵略戦争によって
帝国主義として復活し
米帝のベトナム侵略戦争によって
主力帝国の座にのし上がり
アジア
アフリカ
ラテンアメリカからの
新植民地主義収奪で

肥え太り
膨脹し
日帝本国人の生活は
アジア
アフリカ
ラテンアメリカの人々の
犠牲の上に
成り立っているということを
父は否定する根拠を
もっていない
だから日帝本国人は
寄生虫的存在であり
共産主義的解放のためには
オノレの寄生虫的在りようを
自ら否定しなければならぬ
ということ
父は否定する根拠を
もっていない
オマエの言う共産主義が
ソ連式社会主義とも違うこと

中国式社会主義とも違うこと
自然と人間が融合し
皆が協力し合い育み合う
自由平等な共同体である
ということ
父は父なりに理解しよう
だが少数者の
バクダン・ゲリラ・銃撃戦で
オマエの言う革命が
勝利するものだろうか
父の疑問に対して
オマエは言うだろう
革命は
座してはやってこない
革命は
熟柿が落ちるのとは
訳がちがうのだと
武装闘争こそが
革命情勢をつくり出し
武装闘争こそが

本国と植民地との
革命闘争を同質化し
武装闘争こそが
主体の在りようを
根底からくつがえし
武装闘争こそが
未来社会の土台を
築き上げるのだと
確かにオマエの
言う通りかも知れない
だがかつて
人民に支持されない革命が
勝利したためしがあるか
父の疑問に対して
オマエは言うだろう
人民の一人一人が
オノレの在りようを
変えることこそが
問われているのだと
人民一人一人が

自分自身を革命し
革命を支持するのではなく
革命の主体になるのだと
確かにオマエの言う
通りかも知れない
父はかつて戦争中
若い八路軍兵士を殺した
殺さざるを得なかった
殺される前の
その若い八路軍兵士の瞳は
革命勝利と
日本軍敗北の
絶対的確信に燃えていた
父はその気迫に恐怖した
今父は
オマエの中に
その若い八路軍兵士を
見てしまう
これだけは確認しよう
父とオマエの間には

深い大きな河がある
この河を
渡らなければならないのは
この父だ
この老いさらばえた父に
渡河は厳しく困難だ
だがいかに厳しく
困難であろうとも
たとえ渡り切れずに
溺れ死のうとも
その一步を
踏み出さねばならぬのだ
父が殺した
あの若い八路軍兵士の
反日魂を
オマエとともに
生き返らせるために
それこそが
この父にとつての
オトシマエのつけ方なのだ

一九七九・二・六

死刑執行人の喉頸をこそ・・・

看守どもの妨害はねのけ
しばし壁を隔てつつ
言葉をとりかわし
心のふれ合いをもった
見知らぬ友よ
君はいまいずこに
あの夜
迫り来る闇を打ち倒さんとして
君は単身独房で蜂起した
壁を突き崩さんとして
壁に叩きつけられる
君のその肉体の叫びを
獄舎を突き抜けるその叫びを
俺は心臓の止まる思いで
耳にした
それは張りつめすぎた琴線が
耐えきれずに切れた如くに
一瞬時間を凍らせて

俺の胸を突き刺した
全てを奪う闇の恐怖から
その魂を解き放たんとする
君の単身蜂起を
だれが非難できよう
血を吹き出す
君の魂は叫んでいる
覚めた意識を眠り込ます
坊主どものゴマカシを
拒絶せよと
ヒューマニスト面した同情は
やめてくれと
道学者面したなぐさめは
よしてくれと
ぬくぬくと肥え太る
日帝市民どもの
欺善のポーズは
もうたぐさんだと
その夜
君の叫びに身を振る

俺は現に夢を見た
死刑台に吊るされた
君のその姿を

否！

俺が見たのは

君のその澄んだ瞳に映し出された
無力な俺自身の姿だったのだ

もはや

沈黙の中に

跳き続けることは

許されまい

絶対に

一時の待機が

いま一人のイケニエを許してしまうのだ
人を喰う国家を撃ち滅ぼせ！

人柱なしには成り立たぬ

国家権力を打ち倒せ！

死刑執行人の喉頭をこそ

いの一番に

ぶった切れ！

日本帝国の息の根をこそ
全力をあげて
たたつ切れ！

一九七九・五・一九

亡獄花

ボウゴクカ

芽吹いて芽吹いて亡獄花

鉄とコンクリートとの狭間から

咲いて咲いて亡獄花

光と風と緑に焦れて

翔んで翔んで亡獄花

夢と自由と戦いを求めて

燃えて燃えて亡獄花

血と暴虐の地獄を撃たんと

一九七九・三・三一

燃える足

冬の地肌は氷のムシロ

裸足で走る吐く息白く

痛点燃える足ペタ蹴って

廻るグラウンド二〇歩限り

心は翔んで跳ねて青空高く

胸は弾んで獄壁越えて

頬は冷気に頬火照らして

廻るグラウンド何十周

そろそろ汗が汗ばむ頃に

足は痛さも失なつて

さあ時間だ！

終わりだ！

やめれ！

の号令

クソジョン看守のケチ野郎

ジャジャジャと流す水道に

真赤に燃える足と足

ジャジャジャとかかる冷水に

真赤に燃える足と足

一九七九・一・一二

五・一九―六・二五
地下からのメッセーじ

友よ！

こうべ垂れるな

肩落とすな

たとえ私が死のうとも

友よ！

後ふりむくな

歩みとめるな

たとえ私が死のうとも

友よ！

涙落とすな

明るさ消すな

たとえ私が死のうとも

友よ！

決して忘れるな

この怨みを

たとえわが身の

千々に砕けて消えんとも

タンポポ童子

タンポポポ われら苦しみともにして

タンポポポ 冬の厳しさ乗り切つて

タンポポポ 地下に深く根を張つて

タンポポポ 地上に燃える花咲かす

タンポポポ われら不屈のタンポポ童子

タンポポポ われら喜びともにして

タンポポポ 春の陽射しを糧にして

タンポポポ 地下に深く志を張つて

タンポポポ 地上に燃える義を咲かす

タンポポポ われら不屈のタンポポ童子

タンポポポ われら怒りとともにして

タンポポポ 搾取・暴虐終わらすために

タンポポポ 空に舞い翔び

タンポポポ 大地に満ちる

タンポポポ われら不屈のタンポポ童子

わが魂は永久に

君の行く手を照らし出す

たとえわが身の

燃え尽きんとも

わがまなざしは永久に

君の戦いを守り切る

友よ！

こぶしつき出せ

怒りを燃やせ

勝利の時をつかむため

怒りもつ手に

銃握りしめ

地の底から立ち上がろう

闇の底から立ち上がろう

一九七九・二・五

タンポポポ われら勝利とともにして

タンポポポ 夢に見し日をたたえ合う

タンポポポ その日の来るのを胸に秘め

タンポポポ 今日命の炎を燃やす

タンポポポ われら不屈のタンポポ童子

一九七九・四・一九

IV
後
記

反日共同体文化の創出に向けて

1

本詩集は、東アジア反日武装戦線K.F部隊（準）の構成員が一九七九年一月から五月にかけて、獄闘のあい間をぬって、否獄闘の一環として書いた詩二九篇と訳詩二篇を収録したものであり、内容的には、隊内思想闘争の一つの共同産物ということができよう。とりあえず、著者名を、フレ・エムシ（アイヌイタックで「赤い刀」）としたが、これは市民社会的意味での私の人格と見られるべきではなく、K.F部隊（準）という一つの戦士共同体の代表的人格と見られるべきである。

2

我々の表現活動は、あくまでも、反日武装闘争を軸とした反日闘争という総体的枠内のなかでおさえられており、何よりも反日武装闘争を優先することはいうまでもないが、我々は、反日武装闘争の発展を基母としつつも、未来社会のありようを射程に入れた、反日共同体文化の創出が、現在のにも問われていると考えている。

すなわち、日本文化の枠内での、ブルジョア的なもの

に対するアンチとしての、プロレタリア文化の創出ではなく、日本文化をトータルに根底から滅ぼし、原始共產制文化の復権を内に孕んだ反日共同体文化を創出すること、このことが、反日人民戦争（総領域・総力戦）の一つのテーマとして、現在の提起されている、と考えている。

反日共同体文化の核心は、共產主義的人間関係Ⅱ自然関係、またそこにおける新たなモラル・価値観・宇宙観の形成にある。本詩集は、この反日共同体文化の創出を先駆的に担おうとするものである。

3

散文にしろ、詩にしろ、表現活動あるいはコトバ表現というものは、その限界——すなわち、それは同志・友人・潜在的味方の心を撃つ武器たらしめることはできるが、敵を直接打倒し得る鉄の弾丸ではないということ——をはつきりとおさえ、過大評価も過小評価もしないこと、そのような認識に立つとき、その固有の根源的力を発揮し得るのである。

そして、それが、具体的実践行動と照合する時、最も有効に、同志・友人・潜在的味方の心を撃ち、反日武装

闘争へとかり立て、反日戦士の誕生を促し、そのことで間接的に敵を撃つのである。

4

本詩を読んだ読者が、反日思想に興味をもち、本詩集が、反日思想を主体化するきっかけとなったならば、本詩集の出版は、その目的を達したということができよう。本詩集をきっかけとした反日戦士の誕生、反日武装闘争を追求しつつ、反日共同体文化の創出に挑戦する同志・友人諸君の出現こそ、我々の強く期待するところである。

一九七九・六・四記